【聖なる人畜】檻の中のハトホル
―仔を産まぬまま、彼女は母乳を垂れ流す―

著者：ばんかー　サークル：ｓｉｌｅｎｃｉｏ

ＳＡＭＰＬＥ

【注意】

本作品は、十八歳未満の方の閲覧を固く禁じます。

本作品はフィクションであり、実在の人物・団体・事件などとは一切関係ありません。

拉致・監禁、薬物による昏睡、身体拘束、不同意性交など、暴力的かつ過激な描写が含まれます。

これらの表現が苦手な方は、閲覧をお控えください。



第一章　苦難の谷

商店街に昔からある「ＢＯＯＫＳ　ＫＡＮＡＹＡＭＡ」のバックヤードには、常に微かな湿り気を含んだ古い紙の匂いが漂っている。

天井で不規則に瞬く安価な蛍光灯が、チチ、と痩せた音を立てるたび、その青白い光が樋口なつみの視界を僅かに揺らした。

なつみは、パイプ椅子の冷たい感触を腰に感じながら、在庫管理の端末に指を滑らせていた。

（……肩、重い）

カーディガンの前をきつく合わせても、スポーツブラの太いストラップが肩に食い込む感覚は消えない。

動くたびに、ブラジャーの生地が熱を帯びて肌を擦り、不快な汗を吸い取っていく。

なつみはこっそり、服の中の肩紐を直した。

「……ねえ、中村さん。あの件、どうにかしてくれない？」

低く、粘つくような声が、なつみの耳を打った。

五十代のパート店員、小沢がマグカップに入った温いお茶を啜り、口元を歪めた。

「篠田君のこと？……また何かありましたか？」
社員の中村が、ノートパソコンのキーを叩く手を止めずに応じる。
清潔感のある身なりと爽やかな笑顔。
明るい声。
しかし小沢の方を一切見ようとしなかった。

「何か、じゃないわよ。さっき目が合ったのに、挨拶一つしないのよ。暗いっていうか、何考えてるか分かんないのよ。気味悪いわよ？樋口さんみたいに、せめてもっと愛想良く振る舞えないのかしらね」
「まあ、彼は……コミュニケーション能力の欠如というか、草食系を通り越して石像みたいですからね。僕も何度か注意はしてるんですけど、壁を作られてしまって。距離感が掴めないというか、正直、関わるだけ時間の無駄かもしれません」
中村の視線が、一瞬だけなつみに向けられた。
「顔」ではなく、もう少し下の膨らみへ。

「樋口さんは偉いわよねぇ、あんな子の面倒まで見て」

小沢が大げさに言う。
続けて、なつみにも聞こえるか聞こえないかの絶妙な音量で続ける。
「……でも中村さん、あの二人、なんだかお似合いだと思わない？どっちも地味で。ねぇ？」
小沢の下卑た笑い声が、狭い部屋に反響した。

なつみは、端末を握る指先が冷たくなるような感覚がした。

※※※

数日後の閉店間際。
なつみがバックヤードに戻ると、部屋中、安っぽい制汗スプレーの匂いが充満していた。

「マジで？ありえへんやろ？ギャハハハ」
学生バイト二人が大きな声で騒いでいる。

壁にかけられた時計を見る。

二十時二十五分。
（いつまでいるんだろ……）

「お疲れ様です…」
小さく声をかけ、入り口近くの椅子に座る。

返事はなく、二人は話し続けていた。
「……マジで、アイツとシフト被るの勘弁してほしいわ」
坂井が、足を投げ出すようにしてパイプ椅子に腰掛けたまま言う。

「何？お前、無視された？」
隣で吉田がスマートフォンのゲームを続けながら鼻で笑う。

「んぁ。こないだの飲み会もさ、一応誘ったってんけど『予定があるんで』やで。あんな陰キャが金夜に予定なんかあるわけないやん。アイツ、一生あの豆腐顔で、マンガでも読んどけや。キモいねん」

坂井の愚痴はテンポよく流れ出た。

吉田はゲームの手を止め、坂井の方に少しだけ顔を寄せる。

「まあ、アイツ構うよりな……樋口さんイジってる方が百倍マシ。お前、見たことある？樋口さんが脚立に上って、高い棚の新刊整理してるときの、あの『胸』」

坂井は声を一段落とした。

そのくせ、話の合間に何度もなつみの方を見た。

「ぶっちゃけ、顔と服装は、アレやけどさ、あのデカさはバグってるって。小走りの時とか、えげつないで？ブルンブルン揺れて。笑いそうになったわ」

吉田は一層声を弾ませて答えた。

「社員さんも言うとったし。『宝の持ち腐れ』って。あんなデカいのに、絶対「さら」やで。もったいなぁ。いやぁ、まじで一回「挟んで」ほしいわぁ」

これ以上聞きたくなかった。

力の抜けた脚をぐっと踏ん張り、立ち上がった。

――ガシャ――

その拍子になつみの座っていたパイプ椅子が大きな音をたてて倒れた。

音につられ、坂井と吉田がこっちを見る。

「ああ、樋口さん、おったんすか。お疲れっすぅ」

悪びれる様子もなく坂井が声をかけた。

「……お疲れ様です。お先上がります」

なつみは、震える脚で扉までゆっくりと歩き出した。

「なに？キレてんの？なあ、あれキレてんの？」

背後で笑い声が上がった。

なつみは振り返らなかった。

扉の取手を握ったが、うまく回せなかった。

第二章　神が与えし

「……樋口さーん。ちょっといいっすか？」
文芸棚の新刊を整理していたなつみの背中に声がかかる。
振り返ると坂井ともう一人、吉田がニヤつきながら立っていた。

「あ、はい……。何かありましたか？」
「いや、ね。返品作業なんすけど、手伝ってもろてええっすか？」

「えーっと……あ、あの、二人は……返品は、いつもやってくれてますよね？」
少し考え、一呼吸を置いて、なつみは答えた。

坂井は少しだけ口調を強め、被せるように続けた。
「俺らバイトやし、判断迷うやつあるんで。最終確認は社員の樋口さんにしてもらわんと」
坂井が顎で示したのは、店の最奥、薄暗い照明に照らされた「成人向け」のコーナーだった。
「僕らが棚から本を抜くんで、樋口さんはリストの読み上げお願いしていいすか？照合、頼みます」
すぐに吉田が被せる。

「はい……わかりました。行きますね」
なつみはクリップボードを受け取ると促されるままに、その場所へと向かった。
成人向けコーナー。
壁一面を覆う扇情的な表紙の数々。
なつみは無意識に背中を丸めた。
「じゃ、一冊目からお願いします。ハッキリ読んでもらわないと、どれか分からないんで」
吉田が棚の前に立ち、底意地の悪い笑みを浮かべた。
なつみは震える手でリストを握り、一番上の行を追った。
（！！……）
文字は見えているが、言葉が出ない。
なつみは小さな声で絞り出すように言う。
「……一冊目は、……『熟女……陥落……大乱交』……です」

「ああ、これっすね。官能小説のやつ」
吉田が棚から一冊の文庫を引き抜いた。

「見てください、これ。これで合ってます？」
差し出された表紙には、はち切れんばかりの肉体を持った女性が、複数の男たちに蹂躙される姿が描かれていた。
なつみは息を呑み、咄嗟に視線をリストに戻した。
「……合って……ます」

「次、お願いします。まだまだあるんで。はよやらんと終わりませんよ」
坂井が急かすように言った。
「……二冊目は、……『淫乱……貴族……令嬢は、……騎士様の……言いなり、です』」
「……なあ、吉田。言いなりって。騎士様にめちゃくちゃにされるんやろなあ、これ」
坂井が隣でクスクスと笑った。
「貴族のわがまま娘が堕ちる瞬間が最高なんですよね。……はい、樋口さん、これ」
吉田がライトノベル特有の、華やかながらも露出の激しいイラストが描かれた表紙をなつみの鼻先に突きつけた。
なつみは頬が燃えるように熱くなるのを感じながら、必死に次の行を読み上げる。
「……三冊目は、……『精液（ザーメン）……狂い、……俺の……いち、もつ……が、世界を、

救う……！？』」
「……ザーメン狂い、か。直球やなあ」
「いちもつって、要はちんこってことでしょ？世界救うとかマジバカバカしい」
なつみに話しかけるわけでもなく、二人で顔を見合わせて吹き出す。

「……次は、……『おしゃぶり……女神様、……淫魔の……触手……快楽……地獄』」
「あー、おしゃぶり。奉仕系？」
「触手、マジそそるわ。……樋口さん、これでいいっすか？」
突き出された表紙には、透明な粘液にまみれた女性が、その「口」を弄られている様子が克明に描かれていた。

なつみは吐き気を堪えるように、喉を鳴らした。
「……五冊目、……『おチ●ポミルク……が、……好きですの！……生徒会長は……穢される』」
「おチ●ポミルク……。要は精……、いや、何でもないっす」
吉田が堪えきれず、プッ、と吹き出した。

「真面目な女が、結局欲しがるようになるって展開、王道っすよね。……なあ、坂井」
「わかるわ。……はい、これ。これで合ってます？」
差し出された表紙。清楚な制服を着た女性が、自らの乳房を押し付けながら欲情した目を向けている。

「……最後、……です。……『ビキニギャル……監禁、……中だし……制裁』」
「監禁に中だし。一番えぐいやつっすね」
「制裁って、要は犯されまくるってことやろ。……樋口さん、お疲れした。これで全部っすね」

「あ、そうそう。これ。一冊だけ返品不可になりそうなんがあるんすけど」
坂井が棚の隅から、一冊の古びた雑誌を取り出した。
それは表紙の端が波打ち、所々がカサカサとした白い汚れで固まっていた。

「これ、結構汚れてるんすよね。パリパリになってて、ページもめくられへん。……吉田、これ何やと思う？」
「うわ、めちゃくちゃ汚ぇじゃん。俺は……わかんねーわ」

必死に笑いをこらえ、吉田が答える。

二人は雑誌のページを無理やり引き剥がそうとし、バリッ、という不快な音を立てた。

「樋口さん……何なんすかね、これ」

坂井がその汚れた雑誌を、なつみの手元のリストの上に置いて問いかける。

真面目そうな口ぶり。

だがなつみにも、自分が明らかにおもちゃにされているのは分かった。

生臭いような、ツンとした独特の匂いが、なつみの鼻腔を突いた。

サンプルはここまでです。
続きは製品版「檻の中のハトホル」でお楽しみください。